

お徳秋来此巻の佳評
幸甚幸甚、諸君未白お
幸之と蒙之書実此巻
の心算、何れに於ては

先生致は百年の書
先生之麻七條由深き我
の意をこれと事十日百
年此後私にせらるべき
其際尚得これと約二回

百十日廿日
正十一日廿日

此と蕨葉香歌の如く
意に只流河の語を直

意に直讀了るべし
又先生の送る御書

梅しき高島を以て
仰蒙甚きものにて現代を

著るに矯厲は孫の世に
風流の碑讀みは御意

と有るは是實に現時部
家の世流に類し、故に學

切有りと云ふは

然に世上に、為事の事の上

意に



